
防空壕

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
防空壕

【Nコード】
N0452E

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
良太は公園の防空壕をアジトにしていた。この防空壕について祖父の源五郎に話を聞いてみると。街の歴史のお話です。

第一章

防空壕

一堂良太の遊び場所は大抵そこだった。公園にある深い穴であった。彼はいつもそこで仲間達と楽しく遊んでいたのであった。

「何かここっていいのね」

「夏は涼しいし冬はあったかい」

それが最大の理由だったがそれだけではない。

「それに誰にも見つからないし」

「いいアジトだよね」

子供の頃は誰でもアジトというものを欲しがるものだ。この穴はそれを考えれば格好の場所なのだ。それでいつもここに集まるのであった。

「そついえばさ」

「何なの？」

「ここって昔は防空壕だったらしいよ」

仲間の一人がその穴の中で良太に対して言うのであった。

「防空壕って？」

「戦争の時に逃げ込む穴だったんだって」

そつ良太に教えるのであった。

「それがまだ残っていてそれがここだったんだ」

「そつだつたんだ」

それを聞いても良太には今一つピンとこないのであった。

「防空壕っていう場所だったんだ」

「何かそれを聞いてもよくわからないよね」

「そつだよね」

彼等にとつてみればそうである。子供にはあまり実感の湧かない話でもある。そもそも防空壕出せんそつだと言われても彼には全然わからないことであつた。

「戦争つて何時あつたっけ」

良太は仲間の一人に問う。暗い穴の中でも蠟燭の火でそれなりに明るい。アジトらしくしたいということであえて蠟燭の火を使っているのである。

「さあ。うちのお婆ちゃんが子供の頃らしいよ」

「うちのお爺ちゃんも小さい頃だよね」

良太のお爺ちゃんはずっとこの街に住んでいる。そのこともふと思ひ出した。

「じゃあ大昔だよね」

「うちのお父さんもお母さんも知らないよね」

「そうだよね」

良太は彼に言葉に頷く。

「結局のところは」

「お爺ちゃんにちよつと聞いてみようかな」

良太はふとそう考えるのだった。

「それだと」

「このアジトのことだよね」

「そうだよ」

それを仲間達にも言う。

「色々だね。このアジトについて」

「別にお化けが出るとかいった話はないよね」

それについてはかなり不安な一団だった。そうしたことを怖がるのはやはり子供であると言えた。良太にしる仲間達にしるだ。

「あるかも」

それには少し不安になる良太であった。

「ひよつとしたら」

「おいおい、そんなのだったら」

「洒落にならないよ」

「とりあえずは聞いてみるよ」

それでも何とか話を聞くことにするのだった。

「一応はね」

「怖い話はなしだよ」

「それは絶対になしだよ」

「わかったよ」

困った顔で彼等に応えるのだった。

「お爺ちゃんに。聞いてみるよ」

こうして彼は自分の祖父に今自分達が拠点にしているアジトの話
を聞くことにした。家に帰ると居間でお茶を飲んでいる祖父の源五
郎に対して尋ねるのであった。

「おお、良太か」

「うん」

源五郎はいつもこの今でテレビゲームをしているかお茶を飲んで
いる。意外と気が若く趣味はテレビゲームなのだ。漫画も好きだ。
銀髪を奇麗に後ろに撫で付けており皺も少なく外見は実際の年齢よ
りも遙かに若く見える老人である。良太をよく可愛がっていて良太
も彼になついている。そうした祖父である。

「お菓子か？それなら」

「お菓子もいいけれど」

まずは源五郎が差し出したマロングラッセを受け取る。見れば彼
が飲んでいるのは紅茶である。こうしたところも中々洒落ているお
爺ちゃんであった。

「ちよつと聞きたいことがあるんだ」

「ゲームの攻略のことか？」

「ううん、それは後で」

良太は源五郎の向かい側に座った。そうしてマロングラッセを食
べながら話をするのだった。

「今はね。別の話題」

「では漫画か？」

「そうでもないんだ」

それも否定するのだった。

「実はさ、公園の穴あるじゃない」

「公園のか」

「そう、大きな穴」

それを今自分の祖父に対して言うのだった。

「そのことを聞きたいんだけど」

「ああ、防空壕か」

源五郎はそれを聞いてわかったような顔を見せてきた。

「あそこのことか」

「その防空壕だけんどさ」

良太はそれについて聞くのであった。

「何の為にあつたの、あれって」

「何じゃ、知らんのか」

源五郎は孫のその言葉を聞いて紅茶を飲む手を少し止めて彼に言ってきた。

「前に言ったと思うがな」

「聞いてないよ」

本当に聞いていないのか覚えていないのか。とにかく源五郎は首を横に振るだけであった。

「戦争の時に逃げる場所だつて聞いたけれど」

「その通りだ」

孫の今の言葉に頷いてみせてきた。

「知つとるじゃないか」

「一応はね。けれど何で穴の中に逃げたの？」

「空から爆弾が落ちてきてな」

「爆弾が」

これを聞いてもあまり実感が無い顔であった。

第二章

「そうだよ。空から爆弾を落としていたんだ」

「ふうん。何か色々あったんだ」

「あつたさ。それで街も何もかもが滅茶苦茶になつてね」

「滅茶苦茶!？」

良太はそれを聞いても今一つわからない感じであった。

「地震が起こつた時みたいな感じかな」

「そうだな。あれにそっくりか」

源五郎も孫の言葉を聞いてまた頷く。その通りだと言つたような感じであった。

「ああいうふうになつて。沢山の人が死んだ」

「沢山の人が」

「あの公園だつたな」

源五郎はここで言つてきた。

「そうだな」

「そうだよ」

良太もそれをまた応えて言う。

「あの公園の穴だけけれど。知ってるんだ」

「今から行くか」

彼は紅茶を飲み終えたところでまた声をかけてきたのだった。

「その防空壕に」

「わかつたよ。それじゃあ行くんだね」

「すぐにな。色々話すこともあるしな」

「じゃあ行くこう」

良太もむべもなく源五郎の言葉に頷くのだった。

「何か色々と興味を持ったしね」

「そうか。それはいい」

源五郎は孫の言葉を受けて笑顔を見せてきた。

「では尚更いい。行くか」
「うんっ」

こうして二人は立ち上がりそのまま公園に向かった。二人で公園まで歩きながら話をしていった。

「この辺りも滅茶苦茶になっていたんだ」
「この辺りも」

源五郎は今歩いている道の周りを見回りながら良太に話していた。
「そうさ。アメリカ軍の爆撃でな」

「何かイラクとかのあれみたいなんだね」

「ああ、同じだな」

孫のその言葉に頷いてきた。

「ああした感じで徹底的にやられた」

「戦争だからだね」

「戦争になるのは色々あつて仕方がないことさ」

源五郎はそれについては諦めている感じだった。それが言葉にも浮き出していた。

「人が死ぬのも。当然なんだ」

「死ぬのも」

「良太はそんなことはわからないよな」

「悪いけれどね」

良太は素直に祖父の言葉に頷いてみせた。

「戦争つて。テレビで観るだけだから。あとは漫画やゲームかな」

「そうしたものだろうな。それも仕方がないさ」

「仕方ないつて」

「実際に経験しないとわからないものなんだ」

それを孫に対して告げてきた。

「戦争は特に」

「特になんだ」

「ひい爺ちゃんが戦争に行っていたのは知ってるよな」

「左手なくなつたんだっけ」

良太の曾祖父であり源五郎の父である亀太郎は戦争で左手をなくしているのだ。良太は彼に会ったことはないがそのことは聞いていたのだ。

「確か」

「そうさ。けれどそれも仕方ないんだ」

「全部仕方ないんだね」

「あの戦争だつてな。皆賛成したんだからそれが彼の考えであつた。」

「皆。しなければいけない戦争だつたんだ」

「あれっ、それって」

だがここで良太はあることに気付いた。

「先生と言っていることが違うよ」

「あのね、良太」

先生のことが出たところで源五郎の顔が微妙な感じになった。それからまた彼に対して言うのであつた。

「先生がいつも正しいとは限らないよ」

「そうなんだ」

「特に最近の先生はね」

「こつても言い加えてきた。」

「酷い人が多いから」

「そうだつたんだ」

「戦争が終わつてから急に酷くなつたんだ」

彼はさらに言う。

「終わつてから本当に。先生は酷くなつたよ」

「それも言っていることが違うよ」

良太には話がわからなくなつてきた。先生の言っていることと自分のお爺ちゃんの言っていることのどちらが正しいのかわからなくなつてきたのだ。

「それも」

「こつ教えているんだらう?」

源五郎にはもうわかっていた。

「戦争前の先生は暴力的で厳しかったって」
「うん」

その通りだった。言い加えればしかも教育の内容も間違っていた。そう全否定されているのである。彼はそれを知っているのだ。

「けれど。多分今の方がずっと酷いね」

「そうなんだ」

「昔は。幾ら何でも感情的に暴力を振るう先生はいなかったよ」

今の教育ではそうした教師がまま見られる。一番恐ろしいのはそうした教師が最近までは何のお咎めもなしだったことだ。これを腐敗と言わずして何と言っのだろうか。

「ちゃんと教育を受けたしっかりした人が多かったからね」

「ふうん」

「少なくともこれだけは覚えておくんだ」

そう前置きして言い加えてきた。

「先生の言うことがいつも正しいとは限らない」

「それをだね」

「良太もそろそろ自分で考えてもいい頃だし。色々な先生を見ていくといいさ」

「見ていたらわかるんだね」

「そうさ。常識を踏まえてね」

そう良太に語る。

「そうして考えていけばいいよ」

「わかったよ。それじゃあこれからそうして考えていくよ」

「御願いだよ。さて」

ここで公園に着いた。そのアジトのある公園だ。夕方かなり深くなり夜が近付こうとしていた。公園は橙から紫、そして黒になるうとしていた。

「ここだけね」

「場所、知ってるんだよね」

「勿論」

そう良太に答えた。

「ここも。変わったな」

「変わったんだ」

「昔は何もなかったんだ」

公園を見ながら言う。今公園は木々が溢れ様々な遊び道具も置かれている。ブランコもあれば砂場もある。まさに子供の遊び場だ。

第三章

「戦争で全部焼けてね」

「本当に何もなかったの？」

「そう言っても信じられないだろうね」

「うん、やっぱり」

良太は素直に答える。それはとても想像できなかった。

「ここがそうだったなんて」

「それで昼にこの辺りを歩いていると」

源五郎は昔を懐かしみながら話す。自分の頭の中の記憶を辿りながら。

「空襲警報が鳴って」

「それでここに逃げ込んでなのかな」

「そう。それで」

公園に入る。良太もそれについて行く。

「ここにね」

すぐにアジトを見つけた。源五郎の目はそれを見つけて細いものになった。

「入って。敵が帰るまで隠れていたんだ」

「アジトだったんだね」

「ううん、少し違うね」

それは否定する。首を横に振ってみせる。

「それは」

「そうなんだ」

「逃げ込んでいたから」

源五郎はこう孫に語った。

「だから僕達の間では本当に防空壕だったんだ」

「アジトじゃなくて」

「そうだよ。けれど」

アジトの中に入る。その中も知っているのがわかる。足取りが実に慣れたものであった。むしろ良太の方が慣れていない程であった。

「この中で。いた時は」

「どうしていたの？」

「皆と一緒にの時はあれこれ話したり」

目を細めながらの言葉だった。

「一人の時も置いてあったメソコをしたりして。それなりに楽しかったけれどね」

「戦争でもそうだったんだ」

「そうだよ、戦争でもね」

そのアジトの中に座り込んで孫と向かい合った。そうして蝋燭の火を点けてその中でまた話をするのであった。

「こうして時間を過ごしたんだ。それでも子供だったから」

「今の僕達みたいに？」

「そう」

孫の言葉に頷いてみせる。

「こうしていつも話していたよ、その時は」

「けれど。アジトじゃなかったんだね」

良太はそのことを考える。考えればそうなのだ。源五郎にとってはアジトではなく防空壕なのだ。そのことに気付いたのであった。

「お爺ちゃんにとっては」

「そうだよ。楽しい思い出ばかりじゃない」

それも言っ。

「助かる為にここに飛び込んだりしてきたから。だから」

「怖い思いもしたんだ」

「けれどいつもここまで入ったら怖くなくなっただ」

「また目が細まる。やはり昔のことを思い出しているのだ。」

「安心できたよ。だからここでも遊べたんだ」

「そうだったんだ」

「そうした意味では良太と同じかな」

こう語ってみせる。

「多分だけれど」

「けれど。全然違うんだね」

良太はこれもわかった。

「戦争があつたから。昔は」

「それでも良太と同じで遊んでいたんだ」

それは言う。

「同じこともあれば違うことだってあるんだ」

「そういうものなんだ」

「そう。それにしても」

今度は過去と今を見ていた。その中で自分の孫に話す。

「良太がここで遊んでいるなんて。これも縁なのかな」

「ねえお爺ちゃん」

良太はここでふと考えた。そうして源五郎に対して言う。

「ひょっとしたらだけれど」

「うん」

「僕の子供とか孫もここで遊ぶのかな」

そう祖父に対して言うのであった。

「それはどうかな」

「それは有り得るだろうね」

源五郎はそれに応えて穏やかな笑みを浮かべて良太に対して言うのであった。

「良太がずっとこの街にいればね」

「やっぱりそうなるんだ」

「可能性はないわけじゃないよ」

それをまた言ってみせる。

「僕だってそうだったんだしね」

「そうかあ。そうしたらやっぱり」

ここでずっと先の未来を見るのだった。とても想像すらできない未来だけれど。それを見るのであった。

「僕もやつぱり。今のお爺ちゃんみたいに」

「なれると思うよ」

「穏やかな声でまた孫に言ってきた。

「きつとね」

「じゃあその時また話すよ」

良太も笑顔になつて。源五郎に言う。

「ここでお爺ちゃんと話したことと同じことをね」

「その時街はまた変わっているだろうけれど」

源五郎はそれだけはわかっていて。既に彼が子供の頃と今で街は完全に変わってしまったからだ。それで今も変わり続けている。だからそれだけはわかるのであった。

「人は同じだからね」

「同じなんだ」

「僕は変わっていないから」

確かに源五郎はあの時の心をまだ持っていると言えた。素朴で純粹な子供の心を。戦争があってもそれから色々なことがあっても彼は変わってはいないのだった。

「良太もね。きつと」

「そうだね。それじゃあ」

良太は頷いてまた言う。

「お爺ちゃんみたいにお話するよ」

「うん、絶対にね」

そう祖父とアジト、つまり防空壕の中で言い合いそれから楽しく話をするのであった。そうして月日が経ち。もうすっかり髪の毛が白くなってしまった良太は孫の修を連れて散歩をしていた。既に街は完全に変わっている。人類が宇宙に出るのも普通になってしまっていた。

「ねえお爺ちゃん」

「何だい？」

自分の手を握っている優しい孫に対して穏やかな笑顔を向けて応

えた。

「僕、アジトを持っているんだ」

「ほう、アジトを」

その言葉を聞いて来たと思った。待ち望んでいたその時がだ。

「うん、公園のね」

「そうか、そうか」

それを聞いてさらに微笑む。ここまでも同じだったからだ。

「それでそのアジトは何処にあるのかな」

「うん、それはね」

そうしてまたあの公園に入るのだった。あの頃からまた全然変わってしまった公園だけあのアジトだけは変わってはいなかった。良太はそのことをまた知るのであった。孫とあの時と同じように話をしながら。ここまでも何もかもが同じなのであった。

防空壕

完

2008・1・7

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0452e/>

防空壕

2010年10月8日15時04分発行